

CeBIT 2017 にパートナー国として参加する日本

竹内芳明

経済産業省商務情報政策局審議官

2017年3月20日から24日までの5日間、ドイツのハノーバー市において世界最大級の情報通信・デジタル分野の展示会CeBIT (セビット、ドイツ国際情報通信技術見本市) が開催される。今年は我が国がCeBITのパートナーカントリーとなった。

CeBITは1970年以来年々規模を拡大し、毎年開催されている。昨年は70か国から3300社が出展し、世界100か国から約20万人が来場。来場者の四人に一人がドイツ国外からであり、まさに国際展示会である。世界中から注目を浴びているモノのインターネット(IoT)、人工知能(AI)、バーチャルリアリティ、ロボット、ドローン、サイバーセキュリティ等に関する最新技術について広く展示されるほか、産業界・政官界より多数のトップが訪れ、各国のIT戦略や技術を広く発信す

る場としても活用されている。

CeBITの特徴として、毎年異なる国に焦点を当てる「パートナーカントリー」制度がある。その国の特徴的な技術や製品、国としての戦略等を広く世界に発信するためのものであり、2014年は英国、2015年は中国、昨年2016年はスイスが自国をアピールした。そして、昨年5月の日独首脳会談の際のメルケル首相と安倍総理の間での合意を踏まえて、日独間で協力合意の覚書が締結され、我が国が「CeBIT 2017」におけるパートナーカントリーとして参加することが決定した。この指名は大変光栄であると考えており、経済産業省のみならず総務省をはじめとした省庁、関係機関、産業界が幅広く協力し、パートナーとして有意義なCeBITとなるよう準備を進めていきたい。

同時にCeBITは我が国の製品・サービスのみならず、戦略を世界に発信する機会でもある。世界中を席卷している「第四次産業革命」とも呼ぶべきIoT、ビッグデータ、AI、ロボット等による技術革新により、今後データが爆発的に増加すると予想される。我が国は、国内のみならず海外に拠点を持つ我が国の事業者や協業先との間でこれらのデータを自由に流通させ積極的に活用することにより、イノベーション創出や競争力強化につながると考えている。それは同時に、最先端技術の社会実装を通じた少子高齢化を含む社会的課題の解決を進める上で必須であるばかりでなく、国際経済全体に対して利益をもたらすものと考えている。しかし、世界ではそれらのデータの囲い込みなど流通を制限することによって自国の利益のみを守ろうとする動きもある。これに対し、国際社会が協調して働きかけていくことが喫緊の課題である。

目次

巻頭寄稿文	
CeBIT 2017に参加する日本	
竹内 芳明	1~2
インタビュー	
インダストリー4.0	3
会議報告	
日本とEUの安全保障関係	4
人的交流事業	
JDZB科学高校生交流プログラム	5
その他の事業報告	6
2017年事業案内	7
2017年開催予定展覧会	8



日独エネルギー転換評議会(GJETC)第2回会合(2017年1月23日~24日、於ベルリン日独センター)

写真左から:豊田正和GJETC日本側議長、川又孝太郎参事官(在独日本国大使館)、リタ・シュヴァルツェリウア=ズッター(Rita SCHWARZELÜHR-SUTTER)独連邦環境自然保護建設原子力安全省事務次官、ペーター・ヘンニケ(Prof. Dr. Peter HENNICKE)GJETCドイツ側議長

一方ドイツは継続的にものづくりの力を入れ、IoT分野でもインダストリー4.0を掲げて積極的に取組み、さらにはG20においては議長国を務めるなど、デジタル経済において欧州連合(EU)を牽引する役割を担っている。我が国は、ドイツとの間でデータの自由な流通や利活用に関しての共通認識を形成し、共同で世界に発信することは意義があると考えており、CeBITがその絶好の機会になると考える。また、こうした日独両国の連携の強化は、この分野で世界をリードしていくための大きな一歩となる。

両国は2015年3月の日独首脳会談において、両国間でIoT・インダストリー4.0協力を推進していくことに合意、2016年4月には「日独IoT／インダストリー4.0協力をに係る共同声明」に署名している。この共同声明の中で、①産業サイバーセキュリティ、②国際標準化、③規制改革、④中小企業、⑤人材育成、⑥研究開発の六つの分野での協力を促進することが明記された。これを受けて経済産業省が関係機関と協力し、様々な取組を進めてきている。たとえば、国際標準化については両国の専門家同士で複数回の会合を重ね、両国の共同レポートとしてまとめていく予定である。また、中小企業については、IoTの活用等による生産性の向上等に秀でた中小企業を相互に交流させる取組や、支援機関同士の情報を交換することに行っている。さらに、日独で優れたIoT活用事例を収集し、ウェブサイト上に「オンライン・ユースケース・マップ」として掲載することで日独での成果の見える化、ベストプラクティスの共有、日独連携の促進等を進めていくことにしている。

CeBIT初日にあたる3月20日には、ジェトロ(日本貿易振興機構)主催で「ジャパン・サミット」を開催し、ドイツとの関係の深い企業や先進技術に造形の深い有識者による講演やパネルディスカッション等を予定している。

また、パートナー国として我が国の民間企業が参加する「ジャパン・パビリオン」には、118の企業・団体が出展

を予定している。「Create a New World with Japan – Society 5.0, Another Perspective」をコンセプトに、我が国を代表する大企業はもちろん、国内外で注目を集めるベンチャー企業も参加し、「Life/Office/Society」「Infrastructure/Factory」「Element」の三分野の展示を準備している。我が国の技術立国としてのプレゼンスをアピールし、ドイツをはじめとした海外企業とのマッチングや商談を通じて、具体的な国際協業、国際展開につながる場となることを期待している。

出展者のみならず、来場者のみなさまに我が国の取組や技術をご理解いただくとともに、参加される全ての方々にとって意義のある場になるよう、ドイツ側と密に協力しながら、CeBITを共に作り上げたい。

みなさま、是非CeBITにお越しください!

●ドイツメッセオフィシャルサイト

英語:<http://www.cebit.de/en/>

ドイツ語:<http://www.cebit.de/>

●ジェトロプレスリリース

世界最大級IoT関連見本市「CeBIT(セビット)2017」(国際情報通信技術見本市)「ジャパン・パビリオン」の出展者118社・団体が決定

<https://www.jetro.go.jp/news/releases/2017/35f006823a70ba1f.html>



竹内 芳明
経済産業省商務情報政策局審議官(IT戦略担当) 写真 © 経済産業省

「jdzbecho」読者の皆様

今号は、科学技術に関する話題を中心に編集しました。

毎年3月にハノーバー市で開催される国際的な情報通信技術見本市として有名なCeBITに、今回は日本がパートナー国として参加します。官民合わせた日本からの参加を推進した経済産業省商務情報政策局竹内芳明審議官に、CeBITへの提携国参加の意義と情報通信技術分野での日独協力の現況を冒頭エッセイとしてご披露いただきました。今回の日本のCeBITパートナー国としての参加が機縁となって、情報通信技術の日独連携がさらに進展することを期待します。

社会に大きな変革をもたらす情報通信技術の発達を支えるのは人材です。長期的な視点で人材を確保するには、柔らかな感性で科学に関心を寄せる若い世代を育てることが大事と考えます。ベルリン日独センターはオリンパス・ヨーロッパ社の支援で、今年からドイツの理数系教育重点高校生徒の日本訪問を支援する事業を始めます。今号では、その新事業も紹介いたしました。

インタビューでは、今年6月に開催予定の「デジタル化とインダストリー4.0」日欧中会議に因み、主催者の一人であるドイツ・メルカトル中国研究センターのヴェベケ氏に会議の意義をうかがいました。ベルリン日独センターはこれからも科学技術の革新に向けた日独協力の推進に貢献したいと考えます。

終わりに私事ですが、私は5年間のベルリン日独センターでの勤務を終え、3月末に帰国する予定です。1990年からの27年間に断続的に3度、合計11年間にドイツで過ごしました。この30年近い間にはグローバル化やインターネットの進展で人・物・金・情報の移動が激しくなり、一見国を隔てる壁が低くなったような印象があります。たしかに、物理的あるいは制度的にはそれらの動きを遮る障害は低くなったでしょう。しかし、人や物の動きが活発になった程に日独の人々のお互いの理解が深まったかは、なかなか判断が難しいように思います。理解が深まるのを遮るのは、往々にして自らの経験や尺度を以て他を測ろうとする人間の本性にあるように思います。各々の社会には共通の尺度もあれば、それぞれ異なった尺度もあります。日独対話が共通の側面を広げるとともに、異なったものの背景にある固有の事情や考え方の把握まで達するものであれば、互いの理解と協力がさらに深いものとなるように思われます。その意味で、ベルリン日独センターの使命はますます重要になると考えます。そのベルリン日独センターに勤務し、多くの楽しい思い出を携えて日本へ帰ることを幸せに感じています。読者の皆様のご健勝を祈念いたします。

坂戸勝、ベルリン日独センター副事務総長

ベルリン日独センターは、ドイツ・メルカトル中国研究センター（德国墨卡托中国研究中心、在ベルリン）の協力の下、国際（日欧中）専門家会議「デジタル化とインダストリー4.0」を6月に開催することになりました。このアクチュアルなテーマに関し、本紙はメルカトル中国研究センター（MERICS）のヨースト・ヴュベケ（Dr. Jost WÜBBEKE）経済技術部長のお話をうかがいました。

編集部：今ではあらゆる人が「デジタル化」を口にしますが、「インダストリー4.0」という言葉を耳にする機会も増えました。それぞれどのように定義されるのでしょうか。そして、「4.0」はなにを意味するのでしょうか。

ヴュベケ：インダストリー4.0は第四次産業革命を意味し、産業生産現場における最新技術の発展を表わしています。現在のインダストリー3.0の生産現場にはすでに高性能の産業ロボットが投入され、生産工程の多くはソフトウェアに制御されるデジタルプロセスとなっています。その一歩先をゆく「インダストリー4.0」では生産現場、すなわち工場そのものが自立的に思考するようになります。たとえば、工場内の製造機械自身が自動車の塗装を赤にするか緑にするか判断し、機械同士がコミュニケーションするのです。また、製造ラインの遠隔保守をはじめとするデジタルサービスも可能になります。

編集部：なぜインダストリー4.0が必要なのでしょう。インダストリー4.0は大綱条

jdzb echo

ベルリン日独センター広報紙「jdzb echo」は四半期毎（3月、6月、9月、12月）に刊行されます。

発行 ベルリン日独センター（JDZB）
編集 ミハエル・ニーマン
（Michael NIEMANN）
E-Mail mniemann@jdzb.de

本紙「jdzb echo」はPDF版をホームページからダウンロードすることも、eメールでの定期受信も可能です。

連絡先

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany
Tel: +49-30-839 07 0 Fax: +49-30-839 07 220
E-Mail: jdzb@jdzb.de URL: http://www.jdzb.de

図書館の開館時間は火曜日と水曜日正午～午後6時、木曜日午前10時～午後6時です。蔵書借り出しも可能です。

件を立案する政府および最新技術を利用する個々の企業にとってなにを意味するのでしょうか。

ヴュベケ：インダストリー4.0の革命的なポテンシャルを活かせるか否かは、今後の実証次第です。ビッグデータ、クラウドコンピューティング、マシンツーマシンコミュニケーションなどのアプリケーション事業者は、「これこそ革新的な新開発である」と宣伝していますが、中小企業の多くはそのような新テクノロジーを利用することのメリットがどこにあるのか理解できません。最終的に重要なのは、ある生産工程においてインダストリー4.0が実際に応用されるか否かではなく、生産工程が効率的かつ正常に動作するか否かです。政府の課題は、新しいテクノロジーを色々試してみるための適切な大綱条件を設けることです。たとえば、助成制度を設けるとか、コンサルティングの機会を提供することが考えられます。

編集部：経済と社会においてデジタル化が進展することは、システムの脆弱化につながります。現在および将来的にサイバーセキュリティはどのように担保されるのでしょうか。

ヴュベケ：インダストリー4.0においては情報のセキュリティが極めて重要になります。というのもインダストリー4.0ではネットワークを通じて企業機密にも係わる繊細な情報を送信するからです。送信する情報のセキュリティをきちんと担保していない場合は、大量データ送信が落とし穴になる危険性もあります。世界的規模でハッカー攻撃が増えつつある現状では、国レベルおよび企業レベルでのサイバー防衛が必要不可欠です。

編集部：中国、日本、ドイツそれぞれの産業界のデジタル化戦略は異なりますか、それともおおむね類似したものでしょうか。

ヴュベケ：日独中では出発点が異なります。中国産業界は自動化率が低く、未だイン



(写真 © MERICS)

ダストリー2.0のレベルに留まっているに対し、日本とドイツでは産業ロボットの普及率が高く、自動化は高度に進んでいます。したがって、中国は技術開発を大きく進める必要があります。もうひとつの大きな相違が政治と企業の役割です。ドイツでは企業が推進力であり、国家は側面支援者にすぎません。反対に中国では国家が産業の近代化を推進し、産業界は今ようやく目覚めたところです。日独中に共通する一連の課題としてはサイバーセキュリティ、標準化、新ビジネスモデルの開発などが挙げられます。

編集部：インダストリー4.0に関する国際協力のあり方についてお考えをお聞かせください。日独中が相互に学び合う可能性は存在するのでしょうか。

ヴュベケ：日独中が相互に学び合えることはたくさんありますし、研究部門や企業間協力や政治レベルの二国間プラットフォーム構築などを通じて共同で課題に取り組むこともできます。たとえば、ドイツと中国の間にはすでに緊密な協力関係がありますし、複数件のパイロット事業も始動しています。中国は近代的な工場を立ち上げるために外国の最新テクノロジーを必要としていますし、ドイツの企業は中国市場に大きなビジネスチャンスを認めているため、これは両国に資する展開です。また、スマートな生産プロセスを提供する日本の企業にも同様のビジネスチャンスが存在します。

日欧ワークショップ「日本とEUの安全保障関係——日EUの比較でみる脅威の認識と脅威への対応」

開催日：2017年2月9日～10日

会場：ベルリン日独センター

協力機関：エセックス大学

エミール・キルヒナー (Prof. Emil KIRCHNER) エセックス大

日本と欧州連合 (EU) の関係の多くは貿易・経済問題と関連しているため、二日間にわたる本日欧ワークショップの目的は、EUと日本が安全保障分野でどの程度協力し合っているのかを検証することにあつた。本取り組みの出発点は、異なる10の安全保障分野において日本とEUそれぞれが認識している脅威のレベルと、これらの脅威に対してそれぞれがどのレベルで対応しているかを調査することだつた。

また、既存の脅威認識レベルと脅威対応レベルが、特定分野における日EU間の二極間ないしは多極的協力のレベルに対応しているかどうかを調べることも目指した。

ワークショップでは軍事部門(核不拡散、対テロ作戦など)から軍事以外の部門(サイバーセキュリティ、移民、気候変動、エネルギー安全保障など)までを含む幅広いセキュリティ分野を網羅することにより、EUと日本の間の安全保障関係の評価の枠組みを拡充することを意図した。それは、日EU安全保障関係に関する既存の文献に新たな情報を付与することを目指しただけでなく、日EU安全保障関係のマクロレベルの評価から、よりミクロなレベルまたはセクター指向の認識にシフトすることによって、日EU安全保障関係をさらに進展させることも意図したからである。ワークショップの最初の目的は、EUと日本が様々な安全保障分野においてどの程度協力しているかを探究することであつたが、それと同時に最近のないしは現在の域内発展(英国のEU脱退問題など)ないしは域外発展(たとえば、米国、中国およびロシアのスタンス)が、別々の安全保障圏に存在するパートナー間の協力水準にどのような影響を及ぼすか、あるいは影響を及ぼす可能性が高いかも考察することにあつた。そして、当然のことながら、米国トランプ大統領の政策課題を取り巻く不確実性が、議論の際の立った特徴となつた。

ワークショップでは、参加者間の議論を促進するためにヨーロッパまたは日



本の研究者が脅威の認識、制度的対応、様々な安全保障分野における共同協力に関してEUまたは日本の視点からの多数の論文を発表した。これら論文はその後編集過程を経て、日EUプロジェクトのウェブサイト (www.essex.ac.uk/government/research/euja.aspx) にオンライン掲載される予定である。日EU安全保障協力に関する本刊行物に貢献したワークショップのスピーカー以外にも、学界代表者や政策立案者も本ワークショップに参加していた。

本ワークショップは日EU安全保障協力の本質について討議するだけでなく、ヨーロッパと日本の研究者のつながりを強め、ヨーロッパと日本の研究者が企画中の刊行物における実質的な10の

章を協力して書く過程を促進する機会を提供するものでもあつた。以上の取り組みは、2017年6月に神戸で開催する継続ワークショップと2018年初春にブリュッセルで開催する継続会議でさらに強化される。これら継続事業は議論を深める場であると同時に、本議論をより大勢の聴衆に紹介する場ともなる。

この場を借りて、ワークショップ開催のために快適な会場を提供いただき、資金調達および企画運営を支援してくださつたベルリン日独センターに感謝する。参加者から得たフィードバックを基に判断すると、本ワークショップは有意義で参考となつた模様であり、成功裏に実施し得たと自負する。



日独高校生交流プログラム「JDZB-SCIENCEYOUTH PROGRAM」

出会いは未来なり

ドイツの若者も日本の若者も好奇心に満ちていて、最新技術が大好きです。インターネットやソーシャルメディアのお陰で未知の国や住民やその文化に関する膨大な量の情報を手にすることができますが、異国において実際に人と出会い、その文化を知ることによってのみ、人生に影響を及ぼすような決定的な経験を積むことが可能です。だからこそ、「出会いは未来なり」といえるのです。

そこで、日独の高校生に出会いの場を提供するために、ベルリン日独センターは「JDZB-SCIENCEYOUTH PROGRAM」を設けました。本プログラムでは日独の高校生レベルの交流を拡大拡充することを目的に、各校が独自に企画する日独高校生交流事業を財政的に支援します。2017年はドイツの高校が支援対象となります。

日本の高等学校との交流事業を通じて、ドイツの生徒が日本で日本文化や学校生活を体験し、同年齢の日本人生徒と出会い、意見を交換し、互いに色々質問する機会を得ます。「日本とドイツの生徒はなにに興味があ

るのか」「日独の学校生活で類似する点あるいは相違する点はなにか」「未来および社会を良い方向に向けて構築してゆくために、自然科学や技術をどのように活用し得るか」「双方が協力して紡ぎ出せるアイデアはあるか」。このように若いうちに異文化と取り組み、異文化圏の同世代の人と交流することで、若者の異文化理解力およびソーシャルスキルが育まれます。

「JDZB-SCIENCEYOUTH PROGRAM」の支援対象となるドイツの高等学校は理数系の高等学校、または理数系の授業に力を注ぐ高等学校、あるいは日本語の授業のある高等学校です。そのような学校が日本のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校をはじめとする高等学校と協力して自然科学または技術をテーマとする交流事業を意図し企画する場合は本プログラムに応募できます。その際、日本校との関係締結、事業の共同計画・実施は応募校の自主性に委ねられますが、必要な際にはベルリン日独センターが日本校探しをお手伝いします。

2017年には最大40人（高校生および引率教師）の訪日交流事業を支援します。

「JDZB-SCIENCEYOUTH PROGRAM」はオリンパス株式会社海外グループ会社 OLYMPUS Europa SE & Co. KG（在ハンブルク）の財政支援を得て実施するものです。日独が距離的に離れているため自ずとフライト代が高額になるため、フライト代等を支給します。さらに、東京滞在中にオリンパス株式会社の関連施設または帰国後にハンブルクのグループ企業を訪問し、世界有数の光学デジタル製品メーカーの活躍を垣間見る機会を得ます。

「JDZB-SCIENCEYOUTH PROGRAM」に関心がある学校には応募手続きに関する情報をお送りいたしますので、ベルリン日独センターの牧野ひとみ（hmakino@jdz.de）または三浦なうか（nmiura@jdz.de）までご連絡ください。





日独対話会議「現代社会における宗教の役割——仏教とキリスト教」
(2017年2月22日、於ベルリン日独センター)

協力機関：在独日本国大使館

写真は対話会議終了後に同時通訳者に拍手で礼をおくるスピーカー



国際シンポジウム「人口動態の変化とグローバルな人の移動——求められる政策的対応とは」(2017年2月22日、於国際文化会館、東京)
協力機関：フリードリヒ・エーベルト財団東京事務所
写真提供：フリードリヒ・エーベルト財団



第5回日独予防医学シンポジウム「ヘルシーシティ&スマートシティ」
(2017年1月30日、於ベルリン日独センター)

協力機関：千葉大学、シャリテ・ベルリン医科大学、在ドイツ日本国大使館



ベールマントリオ室内楽コンサート(2017年2月6日、於ベルリン日独センター)クラリネット：スヴェン・ファン＝デア＝クイブ(Sven van der KUIP)、ピアノ：ジョンノエル・アッタルド(John-Noel ATTARD)、バスクラリネット：ウルリヒ・ビュージング(Ullrich BÜSING)



クリスマスコンサート(2016年12月16日、於ベルリン日独センター)
「ベルリン・トウキョウ」カルテットがカール・ライスター(Karl LEISTER、元ベルリンフィル首席クラリネット奏者)をスペシャルゲストに迎えるコンサート



国際シンポジウム「日本EU経済関係の未来——英国のEU脱退、自由貿易協定、グローバル化」(2016年12月9日、於経団連会館、東京)
協力機関：経済広報センター



日独会議「日本とドイツにおける食品教育」
(2016年12月6日、於ベルリン日独センター)

協力機関：ベルリン自由大学東アジア研究科、北海道大学

写真はスピーカーおよび関係機関代表者

会議系事業

国際社会における日独の共同責任

日独ワークショップ「グローバルヘルスにおけるドイツと日本の役割」

協力機関：国際開発研究大学院グローバル・ヘルス・プログラム(ジュネーブ)、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科(東京)、独連邦外務省(ベルリン)、日本国外務省(東京)

2017年10月17日～18日

日欧会議「グローバル化のプロセスと民主主義による正当性——日欧比較」

協力機関：ベルリン自由大学、上智大学(東京)

2017年12月11日～12日

エネルギーおよび環境

日独会議「地球エネルギーとエネルギーシステム転換」

協力機関：ドイツ研究センターヘルムホルツ協会・地球科学研究所(ポツダム)、産業技術総合研究所(東京)

開催予定：2017年9月

少子高齢化社会

日独シンポジウム「前向きに少子高齢化に取り組む——子どもを育み、高齢者の参画を促す」

協力機関：独連邦家庭高齢者女性青少年省(ベルリン)、日本国厚生労働省(東京)、ドイツ日本研究所(東京)

2017年5月11日～12日、東京開催

日独会議「少子高齢化にともなう法改正」

協力機関：独日法律家協会(ハンブルグ)、フリードリヒ・エーベルト財団東京事務所、独連邦司法消費者保護省(ベルリン)

2017年7月7日、東京開催

国家、経済、社会

国際(日欧中)専門家会議「デジタル化とインダストリー4.0」

協力機関：德国墨卡托中国研究中心＝ドイツ・メルカトル中国研究センター(ベルリン)

2017年6月12日

日独シンポジウム「ドイツと日本におけるデジタル化とグローバル化」

協力機関：ドイツ経済研究所(ケルン)、富士通総合研究所(東京)

2017年6月13日、ケルン開催

日独シンポジウム「ダイバーシティー——障害者スポーツ&アート&インクルージョン」

協力機関：日本財団パラリンピックサポートセンター(東京)

2017年9月29日、東京開催

国際(日独韓)シンポジウム「均等参画とダイバーシティを通じた社会の民主化」

協力機関：デュッセルドルフ大学東アジア研究所、フリードリヒ・エーベルト財団(ベルリン)

2017年11月30日～12月1日

諸文化の対話

日独会議「文化遺産の継承と発展——無形文化遺産を巡る課題と展望」

協力機関：社会文化学会(東京)、ヒルデスハイム大学

2017年9月7日又は8日

特別事業

国際シンポジウム「グローバル化の中のアフリカ——日独欧アフリカ支援」

協力機関：在独日本国大使館(ベルリン)

2017年3月6日

日独フォーラム第26回全体会議

協力機関：独連邦外務省(ベルリン)、日本国外務省(東京)、日本国際交流センター(東京)

2017年11月16日～17日

文化事業

展覧会

今村綾&ローマン・フレツヒエン二人展

「歴史は我々のもの——メディアにおける女性像」

オープニング：2017年3月29日、19時開演

展示期間：2017年3月29日～5月31日

中里和人&ステファン・カナム写真展

「ヒューマンスケール」

オープニング：2017年6月29日、19時開演

展示期間：2017年6月30日～8月11日

中村洋子押し絵展「富獄三十六景」

オープニング：2017年9月1日、19時開演

展示期間：2017年9月2日～10月20日

音楽会

コンテンポラリー・デュオ「日独の現代音楽演奏会」

村田厚生(トロンボーン) & 中村和枝(ピアノ)

2017年5月17日、19時30分開演

ユンゲ・ドイチェ・フィルハーモニー管弦楽団メンバーによる室内楽アンサンブル「リフレクション。日本×ドイツ」

2017年5月31日、19時30分開演

「日本の現代室内楽」

ノエル＝アンヌ・ダルベレイ(ヴァイオリン)、オリヴィエ・ダルベレイ(ホルン)、井上郷子(ピアノ)

2017年11月15日、19時30分開演

講演会

ノーベル物理学賞受賞者天野浩名古屋大学教授講演会「世界を照らすLED」

協力機関：日本学術振興会(東京)、アインシュタイン財団(ベルリン)

2017年3月15日、18時30分開演

その他

2017年オープンハウス

2017年6月24日

人的交流事業

- ・日独若手専門家交流
- ・日独ヤングリーダーズ・フォーラム
- ・研修プログラム
 - 日独青少年指導者セミナー
 - 日独勤労青年交流プログラム
 - 日独学生青年リーダー交流プログラム
- ・JDZB科学高校生交流プログラム

各プログラムの詳細はwww.jdzb.de → 人的交流事業

展覧会観覧時間

月曜日～木曜日10時～17時

金曜日10時～15時30分

音楽会の申込み受付開始日は追ってお知らせします。

会場について別途記載のない場合はベルリン日独センターで開催します。
詳しくは www.jdzb.de → 個別事業



Kaieidoscope © 今村綾

今村綾&ローマン・フレッチェン二人展「歴史は我々のもの——メディアにおける女性像」

多様なメディアのフィルターを通した女性像と、社会で認識される女性のあり方。これが、ともにベルリンを拠点に活動する二人のアーティストに共通するテーマです。ヨーロッパアートにおける古典的な女性像を引き合いに出し、現代の女性像と照らし合わせる今村綾。ファッション、ライフスタイルやビデオゲームなどの日本のポップカルチャーを通して浮き彫りになる日本の女性像を、あえて日本画風の伝統的なスタイルを用いて表現するローマン・フレッチェン (Roman FRECHEN)。本展覧会ではタイプの異なる両作家の個性的なアプローチをお楽しみいただけます。
オープニング: 2017年3月29日、19時開演
会期: 2017年3月29日～5月31日



Nana Kitade © ローマン・フレッチェン



中里和人&ステファン・カナム写真展「ヒューマンスケール」

中里和人のフォトシリーズの主役である「小屋」のほとんどは日本各地に散在する小さな廃墟と化したような建物でありながら、一種独特な魅力をかもし出しています。画一化された住居建築がどんどんあたりまえになる昨今、中里和人の被写体には人間味と個性があふれています。ハンブルク出身のステファン・カナム (Stefan CANHAM) もこれに共通した被写体を追い、ミニマルな暮らしを目指す人々のプレハブワゴン住居、あるいは香港の住宅難が生んだマイクロサイズの住居などを撮影しています。うまくリサイクルし、とりあえず手に入る材料で作上げた個性豊かなミニ住居は、まるで国境・文化・時代を越えた人々の共通する願いを表しているかのようです。

オープニング: 2017年6月29日、19時開演

会期: 2017年6月30日～8月11日

写真左: 俯瞰写真 © ステファン・カナム

写真右: 青森県むつ市 © 中里和人

中村洋子押し絵展「富嶽三十六景」

押し絵作家の中村洋子が、世界的に有名な葛飾北斎の版画シリーズ「富嶽三十六景」の各場面を押し絵で再現しました。ドイツではめったに見ることのできない日本の伝統工芸「押し絵」の作品展はベルリン日独センターで開催される以外にもヴェルツブルク、デュッセルドルフ、ケルンを巡回する予定です。本展覧会はデュッセルドルフのドイツ恵光日本文化センターとの協力で実現される運びとなりました。

オープニング: 2017年9月1日、19時開演

会期: 2017年9月2日～10月20日

写真 © 中村洋子

